

俊成の「さび」：用例の注釈と考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1997-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 武田, 元治 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1436

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



俊成の「さび」——用例の注釈と考察

武 田 元 治

評語「さび」の歌合判詞に見られる用例の中では、俊成のものが最も古く、十三ほどの用例が残されている。この俊成の「さび」の意味や位置づけに関しては諸家の論があるが、本稿は研究の基礎にもどり、各用例に即した注釈を試み、そこから考えられることを多少整理しておこうと思う。

用例の本文は『新編国歌大観』による。ただし句読点は本文の内容に応じ私見によって付ける。

用例ごとに「通釈」「注」「考察」の三項を設けて述べていく。ただ紙幅に制約があるために、「注」は極力簡略化し、「考察」も周辺の問題をなるべく省いて、要点に絞ってまとめる方針をとる。

1 「嘉応二年『住吉社歌合』社頭月八番」

左 勝 正四位下行内蔵頭兼太皇太后宮亮平朝臣経盛

「五すみよしのまつふくかぜのおとさえてうらさびしくもすめる月かな

右 従四位上藤原朝臣頼輔

「六やはらぐるひかりや月にそへつらむしめのうちにはてりまさりけり

左歌、すがたことばいひしりて、さびてこそみえ侍れ。右歌のこころ、又社頭の月のほいなり。ただし、ひかりや月

にそへつらむといへるわたり、いささかたらぬところあるこちやすらむ。左、なほうたぎまたちまさりてきこゆ。よりて為勝。

【通釈】

左勝

正四位下行内蔵頭兼太皇太后宮亮平朝臣経盛

一五住吉の浦の松を吹く風の音がさえて、ものさびしく澄みわたっている月よ。

右

従四位上藤原朝臣頼輔

一六仏の和らげた光を月光に加えられたのであろうか、社の境内には光がひとしお明かい。

左の歌は、その姿、言葉が詠み方を心得た風で、さびた様子に見受けられます。右の歌の心はまた、社の前の月という題の本来の意味をとらえている。しかし、「ひかりや月にそへつらむ」と詠んでいるあたりは、少々表現に不十分な点があるとも見られそうである。左の歌は、やはり歌全体の姿が（右の歌よりも）まさっていると思われる。そこで左の歌を勝と判定する。

【注】○平朝臣経盛 一一二四—一一八五。○すみよし 住吉。今の大阪市住吉区のあたり。海辺で住吉神社の所在地として知られた。○うらさびしくも 「うらさびし」は、本来心さびしい意と見られるが、和歌では「心」に「浦」を掛けて「塩釜のうらさびしくも見えわたる哉」（『古今集』八五二）などと詠まれることが多く、その場合「心」の意味が薄くなり、何となく（心中に）さびしく感じるというほどの意。○藤原朝臣頼輔 一一二二—一一八六。○やはらぐるひかり 仏教の「和光」に基づく語。「和光」は仏菩薩がその威徳の光を和らげて仮の姿を現すこと。ここでは神仏習合思想による「和光垂跡^{すじやく}」の見方で、仏が光を和らげて神と現れたと見ているのであろう。○しめのうち 神社の境内。○いひしりて 表現の仕方を心得ていて。俊成にはこの語句を歌の「姿」「言葉」のいずれについても用いた例がある。○ほい 本意。ここでは歌の題の本来の意味。

【考察】現存する俊成の判詞の「さび」の用例の中で最も古いものである。この「さび」は動詞「さぶ」の連用形で、後世の「さび」のような名詞として理念化されたものではない（この点は俊成の「さび」の用例の全部に共通している）が、歌に独自の価値を認めて言われる評語と見てよいであろう。

「さびてこそみえ侍れ」と評せられた左歌は叙景的な歌で、住吉の社頭の松風の音も澄み、そこにさす月光も澄んだ森厳蒼古の世界を飾りけのない表現で描きだしているようで、その点から評語「さび」の意味するところもある程度考えられそうである。

なお、左歌には「うらさびしく」の語が見え、これが俊成の「さび」の評語を用いる動機になったのではないかと推測される。ただ、形容詞「うらさびし」に比べると、似た形の動詞「うらさぶ」（『万葉集』三三「ささなみの国つみ神のうらさびて……」以下の用例がある）になると、感情的詠嘆的なところが少なく、それは俊成の用いた動詞「さぶ」も同様であつたであろう。

2 「承安二年『広田社歌合』海上眺望二番」

左 梓

前大納言実定

六二むこのうみをなぎたるあさにみわたせばまゆもみだれぬあはのしまやま

右

頼政朝臣

六二わたつうみをそらにまがへてゆくふねもくものたえまのせとにいりぬる

左、ことばをいたはらずして、又さびたるすがた、ひとつの体に侍めり。まゆもみだれぬあはのしま山といへる、かの黛色迴臨蒼海上といひ、竜門翠黛眉相對などいへる詩おもひいでられて、幽玄にこそみえ侍れ。

右又、そらにまがへてゆくふねもといへる、こころふかくかすめるこちして、くものたえまのせとにいりぬらんは

ども、おろかなる心およびがたくして、勝劣不分明。よりて為持。

【通釈】

左持

前大納言実定

六二武庫^{むこ}の海を、ないだ朝に見わたすと、青いまゆずみそのままに、美しく整った阿波^{あわ}の山かげが眺められる。

右

頼政朝臣

六三海原を空に続くとも見せて、遠い沖を漕いでゆく舟は、雲の絶え間の瀬戸に入り、姿を消した。

左の歌は、用語上細部にこだわらず詠んでおり、さびた姿で、一種独特の歌体であるようです。「まゆも乱れぬ阿波の島山」と詠んでいるのは、あの「黛色^{へいろか}廻臨^{へいりん}蒼海上^{そうかいじょう}」と詠んだ詩とか、「竜門翠黛^{りゅうもんすいだい}眉相對^{まゐがかり}」と詠んだ詩とか、思い浮かべられて、幽玄に見えます。

右の歌も、「空にまがへてゆく舟も」と詠んでいるのは、思い入れが深く、定かにとらえきれないところがあると思われ、「雲の絶え間の瀬戸に入りぬる」という様子も、未熟な私の心には及びがたいものがあって、優劣を決めかねます。それで持（勝負なし）とします。

【注】○実定 藤原実定。一一三九—一一九一。○むこのうみ 武庫^{むこ}の海。「武庫」は六甲山の南側の地（今の西宮・芦屋・神戸のあたり）で、その前の海。○頼政朝臣 源頼政。一一〇四—一一八〇。○くものたえまのせと 「瀬戸^{せと}」は海峡。ここは雲の切れ目を瀬戸と見なしたか。○黛色^{へいろか}廻臨^{へいりん}蒼海上^{そうかいじょう} まゆずみの色の山は、はるかに青海原のほとりに姿を見せている。『千載佳句』・『和漢朗詠集』に収められた賀蘭遂^{がらんすい}の「百丈山^{はくぢやうざん}」の中の詩句。○竜門翠黛^{りゅうもんすいだい}眉相對^{まゐがかり} 竜門山^{りゅうもん}は青いまゆずみで描いた眉^{まゆ}が向き合っていると見える。『白楽天詩後集』巻十一に見える「五鳳樓晚望」の中の詩句。「五鳳樓」は梁の太祖が洛陽に建てた楼で、竜門山は洛陽の西南にある。

【考察】『広田社歌合』の俊成の判詞には、「さび」の用例がこの判詞以下四例見られる。

この用例では左歌に対して「ことばをいたはらず」と言うのと併せて「さびたる姿」と評し、これを一種独特の歌体と認めている。左歌は朝なぎの海上に整った青いまゆずみを思わせる山影を眺望したことを詠んだ叙景的な作で、「ことばをいたはらず」と言うのはこの場合用語上の小細工をせず、簡古とも言える格調で詠まれていた点を指したものでなからうか。そして、そういう古風な落ち着きをもった一首の姿が「さびたる姿」と評せられているのではなからうか。

一方、俊成は左歌の下句「まゆも乱れぬ阿波の島山」について、青いまゆずみで山影を形容した詩句が思い浮かべられると言ひ、「幽玄」に見えると言ひしている。これは美女のイメージがほのかに感じられる点、現実から隔たる奥深さがあるのを「幽玄」と評したかと思う。俊成は「幽玄」も「さび」も歌の姿の特徴を示すのに用いているが、「幽玄」の方は歌の心に重きを置いて言われる傾向があるのに対して、「さび」は歌の言葉に即して言われることが多いのである。俊成の用例では「心幽玄」と言った例は見られるけれども、「心さび」の類の用例は見られない。

3 〔承安二年『広田社歌合』海上眺望十三番〕

左

左京権大夫修範

八三くもはれてよものしまべをみつるかなあまのをぶねになみまくらして

右勝

沙弥寂念

八四あしのはもしもがれにけりなにはがたたまもかりぶねゆきかよふみゆ

左、うたのけしき心ぼそく、すがたもいとをかしくみえ侍るを、あまのをぶねになみまくらしてといへる、よるのうたならば月ありてぞくもものはれまほしく侍る。いかが。

右は、をはりのくのいひとちめたるほど、にほひすくなきやうに侍れど、しもがれにけりなにはがたなど、めづらしからぬ事なれど、さびても侍れば、なんなきにつきて右かつべきにや侍らん。

【通釈】

左

左京権大夫修範

八三雲が晴れて、四方の島々のあたりを眺めた、——漁夫の乗る小舟の中に旅寝をして。

右勝

沙弥寂念

八四葦の葉も、すっかり霜枯れた、——難波潟に、藻を刈る舟が通って行くのが見える。

左の歌は、歌の様子が心細く、歌の姿も大層面白く思われますけれども、「あまの小舟に波まくらして」と詠んでいるのは、夜のことを歌ったとすると、月があつてこそ雲の晴れるのが望ましいと思いますが、いかがでしょう。

右の歌は、最後の句の言い切っているあたりの表現が、余情が乏しいようですけれど、「霜枯れにけり難波潟」と詠んだところなど、目新しいとは言えぬにしても、さびた感じもありますから、格別欠点がないのを取り柄として、右の勝とするのが妥当かと思ひます。

【注】○修範 藤原修範。一一四三—一一八三。○寂念 俗名は藤原為業。生没年未詳。○たまもかりふね 藻を刈るのに用いる舟。「玉藻」の「玉」は美称。「玉藻刈る」「藻刈り舟」は、それぞれ『万葉集』に見える語。○なんなき 難なき。欠点がないこと。

【考察】ここでは「霜枯れにけり難波潟」の句を挙げて「さびても侍れば」と言っている。難波潟は葦の名所であるが、その蕭条とした冬の景を「霜枯れにけり」と端的に表現した点が「さびて」と言われたものかと思う。

なお、この右歌の情景と似た部分をもつ西行の「津の国の難波の春は夢なれやあしのかれはに風わたるなり」を、俊成は「幽玄の体」と評する（『御裳濯河歌合』二十九番）が、これは難波の春を詠んだ能因の本歌の興趣の世界を、遠い面影として感じさせる点に注目して、「幽玄」の評語を用いたものであらう。

4 「承安二年『広田社歌合』海上眺望十八番」

左持

広季

九三みわたせばおきのしほちにくもひちてそらかうみかもわきぞかねつる

右

広言

九四わたのはらくもゐるかにこぎいでてゆふひにまがふあけのそほぶね

左は、ことばふり、すがたさびて、よろしきうたといひつべし。

右は、あけのそほぶねゆふひのいろにまがへたるころ、又をかしくみゆ。だいのころはおなじく、うたのすがたはとりどりなり。よりて又為持。

【通釈】

左持

広季

九三見渡すと、沖の潮路に雲が垂れこめて、空か海かも見分けることができなかった。

右

広言

九四海原を、空と連なる遠くまで漕ぎ出して、夕日かと思える、赤い舟よ。

左の歌は、言葉が古風で、姿がさびて、よい歌と言えるであろう。

右の歌は、赤く塗った舟が夕日の色と見えたと思えたと詠んだ心が、また面白く思われる。「海上眺望」という題の意味するところは同様に詠まれているが、左右の歌の姿はそれぞれ特徴がある。そこで、これも持と判定する。

【注】○広季 中原広季。生没年未詳。○ひちて（水に）浸って。「ひつ」は水にかかる意。○広言 惟宗広言（これむねひろとき）（ひろ）。生没年未詳。○あけのそほぶね 赤く塗った舟。『万葉集』に用例（二七二）がある。

【考察】ここでは左歌に対して「ことばふり」と言うのと併せて「姿さびて」と評し、「よろしき歌」と認めている。「こ

とば古^{ふる}り」と言うのは、下句「空か海かもわきぞかねつる」といった言い方が、「波か雪かとわきぞかねつる」(『貫之集』四六八)のような、後世に使用された例の少ない言い方によっている点などを指したものであろうか。いずれにしても左歌は海と空の区別も定かでない茫漠とした風景を眺望した様子を、新奇な表現を用いず詠みくだして、そういう一首の姿が「姿さびて」と評せられているのではないかと思う。右歌の「あけのそほ舟」も『万葉集』に見える古語に違いないが、その赤色を「夕日にまがふ」ものとするような趣向の歌は、「をかしく」見えても「姿さびて」とは言い難いのであろう。

5 〔承安二年『広田社歌合』述懐十三番〕

左勝

修範朝臣

一四一いたづらにうきよもなかばすぐるまでおくりむかふるはてぞゆかしき

右

寂念

一四二ねざめしてものぞかなしきむかしみし人はこのよにあるぞすくなき

左歌、うきよもなかばすぐるまでといへるわたり、よろしくこそきこえ侍れ。

右歌は、すがたさびて、こころぼそく、げにさる事なりときこえ侍るを、ものぞかなしきとおき、あるぞすくなきといへる、その字きの字おなじさまにぞきこえ侍る。歌合にはさるべきことなるべし。

左は、すゑのゆかしきといふことばや、すこしいかにぞおぼえ侍れど、それはあまりの事なり。以左勝と申すべし。

【通釈】

左勝

修範朝臣

一四一むなくも、つらい人生の半ばを過ぎるまで年月を経た、この身の末路が知りたい。

右

寂念

「四三夜中に目覚めて、何となく悲しい、——昔の知り合いは、もうこの世にいる人が少ない。

左の歌は、「憂き世も半ば過ぐるまで」と詠んでいるあたりが、よいと思われまゝ。

右の歌は、姿がさびて、心細い感じで、まことにものなことであると思われまゝが、「ものぞ悲しき」と言つた上で「あるぞ少なき」と言っているのは、「ぞ」の字に「き」の字を用いた言い方が、同じように感じられます。これは特に歌合では避けるべきことでしよう。

左の歌は、末句の「ゆかしき」という言葉が、少々問題があるようにも思われますが、そこまでとがめては厳し過ぎる評になります。左の歌を勝と判定しましょう。

【注】○修範 3の「注」参照。○寂念 3の「注」参照。○さるべきこと 避けるべきこと。

【考察】前の用例の場合と同様、「姿さびて」の評語が見える。ただこの評の対象となつた右の歌は述懐の歌である点が、これまでの用例で対象となつた歌が叙景的な歌であつたのと趣を異にする。一首はまず「ものぞ悲しき」と詠嘆し、次に昔の知人で生き残る人が少ないことを言い添えているが、新奇な表現を用いず古風とも言える素直な詠み方で、そういう点はこれまでの用例の場合と同様である。

6 〔治承三年十月『右大臣家歌合』十七番雪〕

左勝

寂蓮

三三ふりそむるけさだに人のまたれつるみ山の里の雪のゆふぐれ

右

大式入道

三四旅人ははれまなしとやおもふらんたかきの山の雪のあけぼの

俊成の「やぶ」

みやまの里の雪は、今朝だに人のなどいへる心よろしく侍るにや。たかきのやまの雪は、歌のたけありて優に侍るべし。此たかきの山も芳野の山にこそ侍れ。旅人などのつねにすぐる事はいとなくや侍らむと覚え侍るうへに、雪の夕ぐれ、すこしさびておもひやられ侍れば、又左のかたへつきや侍らむ。

【通釈】

左勝

寂蓮

三三雪の降り初めた今朝でさえ、人の訪れが待たれた、この山里の雪の夕暮れ（の寂しさ）よ。

右

大式入道

三四旅人は、晴れ間もなく雪が降ると思うであろうか、——高城^{たかき}の山の雪のあけぼのよ。

（左の）「み山の里の雪」の歌は、「今朝だに人の」などと詠んだ心が優れた作かと思ひます。（右の）「高城の山の雪」の歌は、歌の格調が高くて優美な作でしょう。ただこの高城の山はまた吉野の山の一部です。それで旅人などが常に通ることはほとんどないでしょうかと思われますし、それに（左の歌の）雪の夕暮れは少しさびた様子に思ひやられますので、また左の方に味方し（て勝とし）ようかと思ひます。

【注】○寂蓮 生年未詳——一二〇二。○ふりそむる……『新古今集』（六六三）に入集した歌。○大式入道 藤原重家。一二二八——一一八〇。○たかきの山 高城^{たかき}の山。今の奈良県吉野郡、吉野山地の山。『万葉集』に「み吉野の高城の山に白雲は行きはばかりてたなびけりみゆ」（二三五六）の歌がある。○たけありて 格調の高さが感じられて。

【考察】この用例では左歌について「雪の夕暮れ、すこしさびて思ひやられ侍れば」と評し、これが左歌を勝とする理由の一つとされている。「思ひやられ」とあるので、左歌に詠まれた雪の夕暮れの情景が「さびて」思い浮かべられるということであろう。そして「さびて」とされる点を、右歌に詠まれた雪のあけぼの場合とも比較して考えてみると、山里の雪の夕暮れの寂しさが主に意識されていると思われる。

すると、ここでは「さび」は歌の心の面を主として言われているように見える。ただ歌の心は言葉を通じて表現されるものである以上、「さび」が言葉ひいては姿の面と無関係に言われているのではないと思う。

7 「文治三年頃『御裳濯河歌合』二十番」

左

三九長月の月のひかりの影深けてすそののはらにをしか鳴くなり

右勝

四〇月みばと契りおきてし古郷の人もやこよひ袖ぬらすらん

すそのの原といへる、心ふかくすがたさびたり。但、人もやこよひといへる、ことばかざらずといへども、哀ことにふかし。右猶まさるべし。

【通釈】

左

三九（晩秋）九月の月の光がふけた色を帯びて、すそ野の原に牡鹿おしかが鳴いているようだ。

右勝

四〇月を見たら思い出そうと約束した古里の人も、今夜（わたしと同じように）袖そでを涙で濡ぬらしていることであらうか。

「すそ野の原」と詠んでいる（左の）歌は、思い入れが深く、姿がさびている。しかし、「人もやこよひ」と詠んでいる（右の）歌は、言葉は飾っていないけれども、とりわけ哀れの深いものがある。右の歌がやはり勝るとすべきであらう。

【注】○影深けて「深ふけて」は夜が更けたことを言うが、「長月」との関連から見ると秋の深まったことも含めて言った

か。

【考察】西行の自歌合『御裳濯河歌合』の俊成の判詞には、「さび」の用例二例が見られる。

ここでは「すそ野の原といへる、心ふかく姿さびたり」と評しているが、「姿」と言う以上、「すそ野の原」の語だけをとり上げたのではなくて、この語で左歌を示したと見るべきであろう。左歌は晩秋の夜更けの月光の下に裾野に鳴く鹿を叙景的にとらえている。そういう静かで寂しい世界をとらえた作者の思い入れの深さを「心ふかく」と評し、またそういう世界を表すのにふさわしい地味な言葉遣いで、落ち着いた歌の姿をとっている点を「姿さびたり」と評したものかと思う。

ただ、勝負の判定としては、右歌の方が「哀ことにふかし」と評せられ勝とされている。

8 〔文治三年頃『御裳濯河歌合』二十一番〕

左持

四一蟋蟀よさむに秋のなるままによわるかこゑの遠ざかり行く

右

四二松にはふまさはかづら散りにけりと山の秋は風すさむらん

左右共にすがたさび詞をかしく聞え侍り。右のまさはぞ、すこしいかにぞきこゆれども、外山の秋はなどいへる末句いうに侍れば、猶持と申すべくや。

【通釈】

左持

四一こおろぎは、秋も夜寒になるにつれて、弱るのか、声が遠くかすかになっていく。

右

四三松の木にまつわる、まさのはかずらは、散ってしまった。里近い山の秋は、風が吹きつっているのであろう。

左右の歌は、共に姿がさびて、言葉遣いが興趣があると思われます。ただ右の歌で「まさのは」と言うのは、少しどうかという気がするけれども、「外山とやまの秋は」などと詠んだ下の句が優美ですから、やはり持と判定すべきかと思えます。

【注】○蟋蟀……「蟋蟀」は、きりぎりす、すなわち今のコオロギ。一首は『新古今集』（四七二）に入集。参考歌「秋ふかく成なり行くままにむしのねのきけは夜毎によわるなるかな」（『堀河百首』八二九、隆源）。○松にはふ……一首は『新古今集』（五三八）に入集。本歌「深山みふにはあられふるらし外山となるまさきのかづら色づきにけり」（『古今集』一〇七七、神あそびのうた）。「まさのはかづら」は「まさきのかづら」のことと思われ、俊成もその意味で判詞に問題視しているのであろう。「まさきのかづら」は、常緑のつる性の植物であるが、初夏と初冬に赤く色づく。

【考察】ここでは左右の歌を「共に姿さび詞をかしく聞え侍り」と評している。左右の二首の西行の歌は、共に晩秋の情景で、秋の風物の消え去っていくころの寂しい様子を詠んでいる。それぞれ参考歌なり本歌なりが考えられるけれども、実感をそのまま詠んだような印象を受ける歌で、晩秋の寂しい情景を、それにふさわしい飾りけのない自然な言葉で表現していると思う。そういう特徴を「姿さび」と俊成は評したのではなからうか。

9 「建久四年頃『六百番歌合』春(上)九番余寒」

左勝

顕昭

「セしがらきのとやまは雪もきえにしを冬ののこすやたにの夕かぜ

右

経家卿

俊成の「やぶ」

一八春かぜはふくときけどもしばのやはなほさむしろにいこそねられぬ

右方申云、左歌難なし。左方申云、右歌めづらしからず。

判云、左、しがらきのなどいへるより、上句はたけありてきこえ侍るを、谷の夕風としもさしたるこそ、あしたはいますこしきゆらんものを。これは、ただ谷の風といふべかりけるが、文字のたらで、夕の字をそへてもやはと（小西本）ゆふべをそへてくれしもやはと聞え侍るにこそ。さらば、ただ谷のいはかげなどかくべかりけるにや。右のしばの屋さびてきこえ侍るを、この狭席をひとへに寒席といへる様に侍るこそ、凡に侍るめれ。猶しがらきの山はすこしまさるべきにや。

【通釈】

左勝

顯昭

一七信樂の、里に近い山は雪も消えたのに、谷の夕風はなお冬の寒さを残している。

右

經家卿

一八春風は吹くと聞くけれど、柴ぶきの家はなお寒く、寒い敷物に眠ることもできない。

右方からは、左の歌は別に非難すべき点はないとの申し出があった。左方からは、右の歌は目新しさが無いとの申し出があった。

判者の意見は次のとおりです。左の歌は、「信樂の」などと詠み出したのを初め、上の句は格調があると感じられますが、（下の句に）「谷の夕風」と指定したのは、朝の方が風が今少し冷えることであろうにと思えます。これは、単に「谷の風」と言うはずであったのが、それでは（和歌として）音数が不足するので、「夕」の語を加えて言ったものかと思われるのです。そうであれば、ただ「谷の岩陰」などと詠むべきであったかと思うのです。右の「柴の屋」の歌はさびた様子に受け取られるのですけれど、ここで「狭席」を専ら寒い席の意で言っているように見えますが、これは平俗な言い方でしょう。やはり（左の）信樂の山を詠んだ歌の方が、少し勝るであろうかと思えます。

【注】○顯昭 藤原顯輔の猶子。一二三〇頃—一二〇九頃。○しがらき 今の滋賀県甲賀郡信楽町。○経家卿 藤原経家。

一一四九—一二〇九。○ゆふべをそへてくれしもやは「くれしも」は「暮しも」とする本も多いが意味がよく通じない。『新校六百番歌合』に引く小西本の「くれし」のない本文による試解を「通釈」には記した。

【考察】『六百番歌合』の俊成の判詞には、「さび」の用例がこの判詞以下四例見られる。ただし、この用例の「さびて」は、承応版本等では「さる体になつてゐる」。

「さびてきこえ侍る」の本文によれば、この評は「右のしばの屋」に対して言われている。その場合「しばの屋」の語句に限定して挙げているのか、それともこの語句によって右歌全体を示したのかという点も、一つの問題であろうが、この後の文の「しがらきの山」の語句が左歌を示すと見られることから、後者の見方が適當であろう。それで、右歌に寒とした「しばの屋」の様子を言葉飾らず詠んでいる点について「さびて」と評したものであらうと思う。

10 〔建久四年頃『六百番歌合』春(下)二十一番蛙〕

左勝

定家

一六二はのかなるかすみのすゑのあらをだにかはづもはるのくれうらむなり

右

経家

一六三みがくれてゐでのかはづはすだけでもなみのうへにぞこゑはきこゆる

右方申云、左歌、霞のすゑ如何。左方申云、右歌旧物歟。

判云、かすみのすゑのあらをだには、歌のすがたさびてこそは見え侍れ。如何。みがくれて井でのかはづすだくなど

は、ふるびては侍れど、さしておぼえ侍らず。浪のうへなどや井でのかはづにもすぎて侍らん。左勝侍らむ。

【通釈】

左勝

定家

一六二 ほかにかかゝる霞の末の荒れた田に、蛙も春の暮れるのを恨んで鳴いているようだ。

右

経家

一六三 水に隠れて、井手の蛙は集まって鳴くのだが、波の上に、その声は聞こえてくる。

右方からは、左の歌の「霞の末」という言葉は疑問があるとの申し出があった。左方からは、右の歌は古めかしい作かとの申し出があった。

判者の意見は次のとおりです。(左の)「霞の末のあらを田」の歌は、その姿がさびた様子に思われます。いかがでしょうか。(右の)「水隠れて井手の蛙すだく」などと詠んでいるのは、古びてはいますけれど、特に古さが目障りになるとは思われません。ただ「波の上」まで声が聞こえるなどと詠んだ点は、有名な井出の蛙にしても度を越えたところであらう。左の勝ということになります。

【注】○定家 藤原定家。一一六二—一二四一。○あらをだ 荒小田または新小田。『古今集』(八一七)以下に用例が見

えるが、荒れた田か、新たに開いた田か、両説がある。○経家 9の「注」参照。○あで 井手。今の京都府綴喜郡井手町。橘諸兄の別荘があった所で、山吹と「かはづ」の名所として歌に詠まれた。

【考察】ここで「姿さびて」と評せられるのは左歌で、左歌が蛙を詠むのに井手などの名所でなく「あらを田」で鳴く蛙をとり上げ、目立った趣向や技巧を用いずに詠んだ点について言っているかと思う。右の方人が左歌の「霞の末」を問題にしたのは、その言葉続きを新奇なものと見たためであらうと思うが、その意見を俊成は黙殺している。

11 〔建久四年頃『六百番歌合』冬(出二十四番襄)〕

左持

頭昭

五二七宇津の山ゆふこえくればみぞれふり袖ほしかねつあはれこのたび

右

経家

五二八けふもまたかたののみにみぞれしてかわくまもなきかりころもかな

右申云、左歌無指難。左申云、右ふるめかし。

判云、袖ほしかねつあはれこのたびといへる、さびてはきこえ侍るを、このうつの山こそよりどころなくや侍らん。

伊勢物語などに、うつの山べのうつつにもなどいへる所にも、みぞれふれりとも見えず。そのゆゑなきならば、みぞれふりぬべからん山も、あはれこのたびといはん所も、おほく侍らんかし。うつの山ゆゑなくては、さまでよりどころなくや侍らむ。右は、^{右の(新校)}かたのみのもの、かの、ぬれぬやどかす人しなければといへるうたも、あられにては、たかりもいますこしをかしきこゆ。左右共、うつの山もかたのみのものいづくにてもありぬべく聞ゆ。おなじ程の事と申すべし。

【通釈】

左持

頭昭

五二七宇津の山を夕べに越えて来ると、みぞれが降り、袖^{そで}を乾かしかねた。ああ、この旅よ。

右

経家

五二八今日もまた、交野^{かたの}の御野^{みの}にみぞれが降って、狩りの衣の乾く間もない。

右方からは、左の歌はさして非難すべき点はないとの申し出があった。左方からは、右の歌は古めかしいとの申し出があった。

判者の意見は次のとおりです。(左の歌に)「袖干しかねつあはれこの旅」と詠んだのは、さびた様子に思われますが、ここで宇津の山を歌ったことは、根拠がないものではありませんまいか。『伊勢物語』などで、「駿河^{すまが}なる宇津の山べ

のうつつにも」などと歌を詠んだところでも、みぞれが降っていたとは見えません。詠みこむのに特に適した理由がないことなら、みぞれの降りそうな山も、「あはれこの旅」と言うのに適当な所も、沢山あるでしょう。宇津の山が
この場合ふさわしい理由がないとなると、あまり取り上げる根拠がないのではありますまいか。一方、右の交野の御
野を詠んだ歌も同様で、あの「あられふる交野の御野の狩りころもぬれぬ宿かす人しなれば」と詠んだ歌にして
も、あられであってこそ、鷹狩りが一段と興趣を増すように思われるのです。左右の歌はいずれも、宇津の山や交野
の御野という地名が（必然性がなく）どこでもよさそうに思われます。同じ程度の歌と言っておきましょう。

【注】○顕昭 9の「注」参照。○宇津の山 今の静岡市宇津ノ谷と岡部町との境にある宇津ノ谷峠。○経家 9の「注」参照。○かたのみの 交野の御野 今の大阪府枚方市・交野市のあたり。皇室の狩猟地であった。○無指難 させる難なし。○ぬれぬやかす人しなればといへるうた 『詞花集』一五二、「鷹狩をよめる」として見える藤原長能の歌、「あられふる交野の御野の狩りころも濡れぬ宿かす人しなれば」。

【考察】ここで「さびて」と評して挙げられるのは、左歌の下句「袖干しかねつあはれこの旅」である。この語句は『万葉集』の歌の語法を思わせるところがあり、『万葉集』には「忘れかねつも」（七二）、「あはれその鳥」（一七六〇）等の言い方が見られる。みぞれに濡れて旅をする心細い思いを、そういう古風で飾らない言葉遣いで詠んでいる点について、「さびて」と評したのであろうと思う。

12 〔建久四年頃『六百番歌合』恋（一）、二十九番尋恋〕

左 持

女 房

六五七たづねつるみちにこよひはふけにけりすぎの木ずゑにありあけのつき

右

信 定

六五八ころこそゆくへもしらねみわのやますぎの木ずゑのゆふぐれの空

左右共申無難之由。

判云、左のすぎのこずゑに在明の月といひ、右のすぎのこずゑのゆふぐれのそらといへる、ともにいとをかしくも侍るかな。左はみわのやまは侍らねど、なかなかをかしきこゆ。ありあけの月の殊にさびて、まさるとも可申を、右、ゆふぐれのそら又おとるべくもみえ侍らねば、猶持と申すべくや。

【通釈】

左持

女房

六五七人を尋ねて来た道で（手間どって）、今夜は更けてしまった。杉のこずゑの上に、有明の月が懸かっている。

右

信定

六五八心はなお、どこへあこがれて行くのか、分からない、——尋ねて来た三輪山の、杉のこずゑの上の夕暮の空よ。

左方右方共に、非難すべき点はないと申し出があった。

判者の意見は次のとおりです。左の歌の「杉のこずゑに有明の月」と詠み、右の歌の「杉のこずゑの夕暮の空」と詠んでいるのは、共に大層興味ゆたかな作と感服します。左の歌は三輪の山を表面に出してはいませんが、かえってそれが興味あるものに使われます。（左の）有明の月が殊にさびた感じで、勝ると申したい気もするのですが、右の歌の夕暮の空もそれに劣りそうには見えませんので、やはり持と判定すべきかと思ひます。

【注】○女房 藤原良経（一一六九—一二〇六）のこの歌合での仮の作者名。○信定 慈円（一一五五—一二二五）のこの歌合での仮の作者名。○ころこそ……一首は『新古今集』（一二三二）に入集。本歌、「わが恋はゆくへもしらずはてもなし逢ふを限りと思ふばかりぞ」（『古今集』六一一）、「わが庵は三輪の山もと恋しくはとぶらひ来ませ杉たて門」（『古今集』九八二）。○みわのやま 三輪の山。奈良県桜井市にあり、大神神社の御神体。

【考察】「有明の月の殊にさびて、まさるとも可申を」と評しているが、「有明の月」だけをとり上げたと見るには簡単すぎる語句であるから、この語句で代表して左歌を示したものの、あるいは少なくとも左歌におけるこの語句をとり上げたものと見るべきであろう。その上で左右の歌を比較すると、左歌の方が、人を尋ねる心細い情景をあまり趣向を加えず、簡素な言葉遣いで詠んでいると思われる。そういう点が「さびて」と評せられているのであらうと思う。

13 〔建久末年頃『慈鎮和尚自歌合』十禅師十一番〕

左勝

一七六むかし思ふたかつの宮の跡ふりて難波のあしにかよふ松かぜ

右

一七七秋風にふじのけぶりのなびき行くをまちとる雲も空に消えぬる

左、難波のあしにかよふ松風、殊にさびてきこえ待り。まさり侍らん。

【通釈】

左勝

一七六高津の宮の跡に昔をしのぶと、長い年月の流れたことが思われ、難波江の葦に吹き通う松風の音がする。

右

一七七秋風に吹かれて、富士の煙がなびいて行き、それを迎えた雲とともに空に消えた。

左の「難波の葦に通ふ松風」は、殊にさびた様子に思われます。左がまさっているでしょう。

【注】○むかし思ふ……『玉葉集』(二六一四)に入集。○たかつの宮 高津の宮。今の大阪市東区の難波宮跡にあつたと推定されている仁徳天皇の皇居。記紀に名が見える。○まちとる 待ち受けて捕らえる。

【考察】この用例では、左歌の「難波の葦に通ふ松風」の句を挙げて「殊にさびてきこえ侍り」と評している。一首は高津の宮の跡で懐古の情にふける時、老松に音を立てる風が難波江の葦原に吹き通う情景を、言葉を飾らず淡々と詠んでおり、そういう点が「殊にさびて」と言われているのであろう。

○

以上、俊成の判詞の「さび」について、用例のそれぞれに即して考えてきたが、ここで全体として見て主な点をまとめておきたい。

俊成の判詞の「さび」は、すべて動詞の連用形で、「さびて」「さびたり」などと言われ、名詞として理念化されていないが、歌に独自の価値を認めた評語として用いられている。

この評語の対象とするところに注目すると、「姿さびて」「姿さびたり」など、歌一首全体の「姿」に対して「さび」を言った場合が多く、それが全用例のほぼ半数を占めている。歌の一部の語句を挙げて「さび」を言った用例も、その語句で代表して歌一首を示したものを含み、少なくとも歌一首の中のその語句を意識することが多いようである。

そしてその歌の姿は、「ことばをいたはらずして、又さびたる姿」（用例2）とか「ことば古^{ふる}り姿さびて」（4）とかの評語の示すように、「ことば」に即してとらえられ、その言葉は飾らず地味で古風とも言える趣をもつ場合が多いことが、批評の対象となった歌から知られる。

このように俊成の「さび」が一首の「姿」に注目し特にその「ことば」に即してとらえられる点は、俊成が一方で用いた「幽玄」の場合と比較してみると、一層明らかになるかもしれない。俊成の「幽玄」も歌の姿・風体・体・様などに対して言った用例が、全用例の半数を占めるが、その姿の類は言葉よりも心に重きを置いて言われる傾向が見え、そのため「心幽玄」と評した用例もある。これに対して「心さび」のような用例は俊成にはない。

しかし、俊成が「さび」の語で評する場合、歌の「心」が無視されているとも思われない。「雪の夕暮れ、すこしさび

て思ひやられ侍れば」(6)と言う場合など、「さびて思ひやられ」るのは歌に詠まれた雪の夕暮れの情景で、歌の「心」が主に意識されていると見られる。もっとも「心」を主として「さび」を言ったと見られる用例はこの外にはないようであるが、一般に心が言葉を通して表現されたのが姿と見られる以上、「さび」と評せられる歌の姿は言葉と共に心の特徴も含めて意識されていたと考えられる。

そのような観点から俊成が「さび」と評した歌の内容を見ると、大部分は叙景的な作であるが、寂しさ、幽かさ、心細さなどの印象を与える情景の歌が多く、一括して言えば艶の色合いの乏しい情景の歌と言えそうである。この点は述懐の歌(5)や恋の歌(12)についてもほぼ言えると思う。そして、そういう内容にふさわしい、飾りけがなく新奇に走らぬ古風な言葉で表現した歌に、独自の落ち着いた渋い趣を見いだした場合、俊成は「さび」の語を用いて評しているように思われる。

俊成が「さび」と評した歌の価値をどの程度認めていたかという点については、勝負の判定状況が参考になるであろう。これは「左右共に姿さび」と評した用例(8)を除外した十二例について見れば、勝五、持四、負三となっている。ただし負三の内の二例(5・9)は、「さび」に関する価値意識とは別に、表現上の欠点があるために負とされたと思われることを考慮に入れる必要がある。それで俊成は「さび」の特長にかなり高い価値を認めていたと言えるように思う。